

平成 17 年度研究功労賞推薦書

受賞対象者 細川 清 先生

細川清先生は、昭和 6 年に広島県北部の東城町で出生され、東京大学文学部独文学科（昭和 30 年卒）、岡山大学医学部（昭和 36 年卒）を経て、昭和 41 年に岡山大学大学院研究科博士課程を卒業なさいました。学位論文は、『分裂病様病像を有するてんかんの臨床的研究』に関するものであり、このことにも臨床てんかん学が終生にわたる最も主要な研究領域となったことが示唆されています。なお、先生のドイツ文学、特にヘルマン・ヘッセに関する興味はその後も持続し、このような経歴から大学院在学中には岡山大学教養部の非常勤講師としてドイツ語の教鞭を執られ、これらのことが後に香川日独協会を創立された布石となっています。

先生は、昭和 43 年から昭和 45 年にかけて、2 年 6 ヶ月間にわたってアメリカ合衆国ウィスコンシン大学に留学され、フランシス・M・フォスター教授が主宰されていた神経科てんかんセンターにて、臨床てんかん学と臨床脳波学に関する研鑽を積み重ねていますが、共同研究者であったハロルド・E・ブッカー教授とのご友誼は、現在に至るまで継続されています。

帰国された後の先生は、一時的に広島県内の公立精神病院の院長として赴任されましたが、昭和 50 年に大月三郎教授のお招きで岡山大学医学部神経精神科の講師として復帰され、昭和 54 年には助教授に昇任されています。主たる研究テーマは、健常者を対象としたジフェンヒドラミンによるてんかん性異常脳波の賦活、非てんかん患者にも出現する非けいれん性てんかん発作重積状態の臨床特徴、てんかん患者の長期予後に影響する要因の多角的検討など、臨床てんかん学と臨床脳波学の多彩な分野に及んでいます。特に、『小発作重積症とその周辺一汎性両側同期性棘徐波複合の連続とその臨床像』（1969）は、本邦における非けいれん性てんかん発作重積状態研究の嚆矢として幅広く引用され、先生のライフワークの発端となったことを指摘しておきたいと考えています。さらに、臨床てんかん学に関する研究分野は、徐々にてんかんを有する人々の心理社会的側面に焦点が絞られ、てんかんの包括的治療とクオリティ・オブ・ライフ（QOL）の改善を指向することになりました。具体的には、アメリカ合衆国で開発された **Washington Psychosocial Seizure Inventory (WPSI)** を本邦に導入なさいましたが、筆者のてんかんの長期予後に関する学位論文や多彩な QOL 評価尺度の紹介は、このような先生の指導の結果として結実したものに他なりません。

昭和 58 年、先生は新設された香川医科大学精神神経科の初代教授として赴任なさいました。何分にも無からのスタートであり、附属病院開設当初には自ら当直業務に従事するなどのご苦労もあったようですが、特に新設大学の卒業生が誕生した以降になると、先生のご指導を希望して入局する教室員が急激に増加し、10 名以上の本学卒業生が精神神経科に入局して、周囲を驚かせるといった事態も出現しました。筆者を含む多数の教室員にとって残念であったことは、精神神経科教授としての先生の在任期間が、予想外の短さに終わってしまったことです。すなわち、先生は平成 3 年に香川医科大学の副学長および附属病院長に昇任なされたからです。その後の先生は、平成 9 年の退官に至るまで新たな職務に専念されたため、精神神経科領域の臨床からは遠ざかる結果となりましたが、8 年間に及んだ教授在任中、学会関係では日本てんかん学会、日本脳波筋電図学会、日本精神神経学会、日本心身医学会などの理事および評議員として活躍され、この時

期の先生の業績は多数の著書や原著論文に示唆されています。特に、昭和 62 年 10 月には高松市で第 21 回日本てんかん学会を開催されましたが、学会のメインテーマは『てんかん治療の合理化をめざして』という内容であり、長年にわたる先生の臨床てんかん研究の集約となりました。さらに、地方会レベルでもすでに昭和 50 年という早期に、現在まで継続されている岡山てんかん懇話会を創立されていますが、この懇話会は各都道府県レベルで相次いで設立されたてんかん懇話会の先駆となったものです。

大学を退官された後の先生は、現在に至るまで岡山市の万成病院名誉院長としてご活躍中ですが、それと同時に臨床てんかん学と臨床脳波学に関する研鑽も再開されています。すなわち、最近になって診療を開始された患者さんに基づいて日本てんかん学会臨床専門医の資格を改めて取得され、それと同時に万成病院が臨床研修のための施設として認定されるなど、現在でも第一線の臨床医としてご活躍中であることを強調させていただきます。

筆者は、精神科医となった当初から現在に至るまで、幸いにも先生の直接的なご指導を仰いできました。このような経緯から、本稿を執筆させていただいた次第ですが、以上の概略的な紹介に示されているような先生のご功績は、本邦における臨床てんかん学研究に多大な寄与を及ぼしたものと確信しています。

香川大学保健管理センター医学部分室 助教授
久郷 敏明